
とある性転の幻想殺し少女(イマジンプレイカーガール)

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イマジンフレイカーガール
とある性転の幻想殺し少女

【Nコード】

N7582S

【作者名】

橘天龍

【あらすじ】

わたくしこと上条当麻は人生最大の不幸を味わっていた…

以外とありそうであまりなかった上条さん性転換の作品です。性転換要素がお嫌いなたはブラウザバックをお願いしますm（
m

第1話：【性転】（前書き）

そついえば上条さんが女の子になる話ってあまりないな…と思って妄想と勢い全開で書きました。

まあ、上条さんはイマジンプレイカーがありますからね。

魔術や超能力での性転換は理論上ないですからね

第1話：【性転】

学園都市…それは人口230万人中そのほとんどが学生で構成された都市である。

ここでは普通の学生としての勉強とともに、能力開発というカリキュラムが設けてあり…それは所謂超能力いわゆると言われる力である

そのせいかこの地では不思議なことが多々あり、わたくしこと上条当麻も例外ではない。…というか俺の場合は主に悪い意味での不思議が多いのだが。

かくいう今もその不思議に会っているわけで…

「不幸だ…」

そう。わたくしこと上条当麻は女の子になっていた。

しかも俺の担任…月詠小萌先生（見た目小学生の大人）と同じくらいの目線といったおまけ付きだ。

どうでもいいが今の俺の声は某魔法少女の主人公のライバル…金髪ツインテールの子に似ていたり。

「っていうかこれじゃあ学校行けないじゃないか…もうすぐ夏休みだつてえのに…不幸だ」

と、今や口癖になっている言葉を吐いた直後

???「カミヤーン！一緒にガッコ行くぜ…よ？」

まさに計ったようなタイミングで俺の悪友の1人、土御門元春が表れた。そして固まる土御門。頭を抱えた状態で固まる俺。

わたくしこと上条麻は性別が変わってしまい、それを知人に目撃されるといって、人生最大の不幸をまさに味わっていた

ふ、不幸だああー！

続く

第2話：【混乱】（前書き）

2話目の投稿です。何とか早めにできました

土御門の口調難しい…

第2話：【混乱】

こんにちは上条当麻です。わたくしは絶賛不幸邁進中であります

朝起きたら女の子になってた。しかも担任の小萌先生と同じくらいの目線、加えてなぜか銀髪（しかもかなり長い）。それだけでも不幸だつてのに

土御門「キミは誰なのかにゃー？」

こんな時に限って何故か登校のお誘いにいらつしゃった、悪友の1人、土御門元春とエンカウントを果たすという不幸っぷり。

これまでの人生で最大の不幸ではなかるうか…

「不幸だ…」

土御門「!？」

思わず呟いていたいつもの口癖。それがどこか幼い子供と話すような表情（たぶん妹の舞夏と同じだろう。ふ、不幸だ…）だった土御門が一変した

土御門「…もしかしてカミヤん…なのか…？」

驚愕した表情で恐る恐る尋ねる土御門。そりゃあ信じられないわな。俺だって先日知り合った常磐台の…名前なんだっけか…その子がいきなり男になってたら信じ…（妄想中）…いや、案外合ってるかも…

土御門「…違う…のか…？」

俺が思考と妄想の狭間をさ迷っていたら、否定と見たのか土御門が再度尋ねてきた。

「信じてくれる…のか？」

俺は某魔法少女のライバルばりのロリボイス全開で聞き返した。

土御門「いや…まだその特徴的な口癖を言ったから疑問に感じただけだ。…本当にカミヤんなのか？」

「嘘みたいな話だけど本当だ。俺は上条当麻だよ」

土御門がみたび尋ねたので今度ははっきり答える。すると土御門は何か思い立ったのか否か、複雑な表情をした

土御門「…（そんなバカな…上条当麻にはイマジンプレイカーがある。魔術や超能力…それに準ずる異能の力は効かないはずだが…とすると…）」

何やら土御門がブツブツ呟いているが俺には全く聞こえなかった

「おーい、土御門ー？」

俺がロリボイス全開で声を掛けてみる。あ、今ビクツとした。

土御門「な、何かにゃー？カミヤん？」

「信じてくれる…のか？」

俺が恐る恐る見上げて尋ねた

土御門「…（う、今のカミちゃん可愛いぜよ…2人目の妹にしたいくらいに…）何言ってるんだにゃー 俺はカミちゃんの親友ぜよ？当たり前だにゃー」

土御門がいつものニヒルな笑みを浮かべる。 あ、なんか涙出そう

土御門「なあ、カミちゃん。 悪いけど俺ちょっとヤボ用があつたの忘れてたぜよ。 だからこのことは小萌せんせに相談したほうがいいんじゃないかにゃー？」

「え、ちょ、土御門？」

急な展開に付いていけずにはわたたと混乱していると土御門が俺の頭にポンツと右手を置く。 …あ、何か安心する。

土御門「大丈夫！小萌せんせは【学園都市】の先生ぜよ？こういう不思議事態にもちゃんと対応してくれると思うにゃー」

思つかよ

まあたしかにこんな事態になっても小萌先生なら相談にのってくれるかも。 どちらにしてもこのままじゃ学校はおろか、生活もままならないし…

土御門「と、そうだ。 そのままじゃ外出歩けないんじゃないかにゃー？とりあえずこれを進呈するぜよ。 ああ、お礼なんていらにゃいにゃー。 今度それ着たのを見せてくれれば充分ぜよ。 それじゃー！」

土御門は外出に不便だろうと白い箱（どこから取り出したんだか…）を押しつけ、矢継ぎ早に捲し立てるとさっさと出ていった。

「なんなんだあいつ。…まあ、今の俺はダブダブのＴシャツと短パンだけだし…お言葉に甘えるか」

そう自分で自分を納得させて箱を開けてみる

「……………は？」

中にはメイド服が入っていた。しかも身に付ける下着も。当然女物。…ああ、そうか…妹の舞夏ちゃんの替えか何かか…

「ふ…不幸だああー！！」

既に人気のない男子寮に某吸血鬼ヒロイン（表）ばりのロリボイスが響き渡った

続く

第2話：【混乱】（後書き）

今回の上条さんの不幸：土御門とのエンカウト・メイド服の進呈・
ダブダブの男物の服を着た痴態を見られる（上条さんに自覚なし）

第3話：【接触】（前書き）

今回は土御門視点です。

上条さんは出ません m (——) m

第3話：【接触】

土御門Side

俺は奴に真意を確かめるべく、奴がいる部屋にきた。

「アレイスター」

俺が巨大な試験管のような物に入った逆さまに漂う人物に声を掛ける

アレイスター『土御門か。一体何用かな?』

奴はいつも通りの無表情で尋ねる

「はっ、知ってるんだろう?...上条当麻のことだよ」

アレイスター『ふむ。彼にはこれから色々役立ってもらわないといけないのだが...少々面倒なことになりそうだ』

無表情で淡々と話すアレイスター。ちっ、よくもぬけぬけと...

アレイスター『何か勘違いしているようだな。今回の件には私は関与していない』

なん...だと...?

土御門「そんなバカな!上条当麻にはイマジンプレイカーがある!あれが有る限り魔術や超能力は効きはしない!あとは科学だろうっ!」

俺は堪りかねて殴り掛からんばかりの勢いで反論する。冗談じゃない、科学じゃないといったら何が影響なんだ！

アレクスター『…少し落ち着きたまえ、土御門元春。とにかく今回の件には私は関与していない。私とて大幅なシナリオの変更をせざるを得なくなつて辟易しているのだ』

ちつ、そうか…奴にとつても【今回の件】はイレギュラーだったということか。

アレクスター『…イレギュラーはあつたが根本的な修正は必要ないと判断している。キミには引き続き【彼女】の監視を頼む』

彼女、ね。奴の中では上条当麻は本当に【女】として認識したらしい。

「任せるんだにやー。俺はそう言つのは得意ぜよ。んじゃ、そろそろ時間だから帰るぜよ。」

俺は迎えに来ていたテレポーターの力で”窓も出口もない部屋”を後にした。

去り際に奴が微笑を浮かべたような気がしたが部屋を出る頃にはすっかり忘れていた

S i d e o n t

続く

第3話：【接触】（後書き）

ホントに土御門の口調は難しい…あとアレイスターも。

作者自身がアニメと原作三巻までの知識しかないので、アレイスターや土御門の口調が可笑しいかもしれませんがどうかご容赦下さい
m (m

第4話：【体験】（前書き）

長らくお待たせしましたm（――）m

第4話：【体験】

こんにちは、上条当麻です。前回と同じくだりなのは恥辱で身投げしたくらいだからです、ハイ。

現在の俺はメイド服に身を包んで学園都市を闊歩してある人の家に向かっている。先ほど土御門から助言を受けたとおり、その人に今後の相談をするためだ。

とはいえ…やはり恥ずかしい…今の俺は銀髪ロリメイドなのである。それこそこんな現場を青髪ピアスに見られたらと思うと…（想像中）
…恐ろしい！確実に貞操の危機だああ！

…ただ、この学園都市には何故か【メイド養成学校】なるものが存在している。それ故かメイド服着た学生はある程度珍しくはあるが、可笑しいものではないらしい。

それでも目立つのは俺の容姿のせいだろう

腰まで伸びる艶やかな銀髪（メイド服着るときにわかった）、大きな青い瞳（洗面所の鏡で確認）、小萌先生よりは高くてビリビリ中学生よりは低い背丈（舞夏ちゃんの替えの服なのにほぼピッタリ）

…

そっちの趣味の人ならまさしくストライクだろう。

……不幸だ…

??「おい、そっちは区域外だぞ。」

と、深い恥辱の極みに達しそうになったときに唐突に声を掛けられる。

しかも相手はあの土御門の妹、舞夏ちゃんだった

舞夏「ん？お前見かけない顔だな。新入生…もしくは留学生か？」

…まずい。どう答える？

『「俺はお兄さんの友人の上条当麻だ」…いやいや見た目が違いすぎる、変な女と思われかねん

…どうしよう。上条さん泣いてもいいかな？

舞夏「む…外国人だから言葉が話せないのか？…まあいい。私は土御門舞夏、お前と、同じ、メイド養成学校の、生徒だ」

ひたすら思考のドツボにハマつてると、舞夏ちゃんは言葉が話せないと思つたのかオーバーなボディランゲージで自己紹介してきた

…よし、それなら好都合。舞夏ちゃんには悪いがここは日本語が話せない外国人美少女（自画自賛）を演じさせてもらおう

「…………（コクリ）」

黙って頷くと、舞夏ちゃんはふむ…と納得したような表情に変わる

舞夏「言葉は理解出来るみたいだな、なら問題はないだろう。行くぞ」

「…っ!？」

急に手を引つ張られた為に思わず声を上げそうになるがグツと堪え、その場に踏み留まる

舞夏「どうしたんだ？今回の実地研修はペアじゃないとダメなんだ。だからお前がいないと私は出られない。だから来い」

「っっ」

声に出しそうになるのを必死に堪えながら俺は舞夏ちゃんに無理矢理連れていかれた…不幸だ…

……それからあつという間（俺はものすごく長く感じたが）に夕方。もうそれこそ1日で1週間分くらいの体力を消耗した気がする…

メイドさんって大変なんだなあ…

舞夏「まあ、留学生で新入生ならあのくらいでいいだろう」

それから俺は舞夏ちゃんと連れ立ってメイド養成学校へ戻る途中である

なんとか抜け出さないと…学校に着いたら部外者だとバレてしまう。でも俺は日本語が話せない無口美少女（自画自賛）だ。適当な理由を話す以前に話せない…と、再び思考のドツボにハマっていると、前方から見慣れた金髪ツンツン頭に青いグラサン男。

土御門「よおつすマイシスター」

舞夏「おお！？お兄様！」

土御門の登場に目を輝かせる舞夏ちゃん。兄妹で仲の良いことで

土御門「今帰りにゃ〜？」

舞夏「うむ、兄上様。今日は第7学区の西方面だなー」

と、舞夏ちゃんが今日の実地研修の出来事を楽しげに話し出した。
土御門も相づちを返しながらニヤニヤしている。コノヤロウ

土御門「んで、その子は誰かにゃ〜？」

舞夏「うむ、留学生で新生だ。名前はわからん、言葉が話せないらしくてな」

土御門がほう…？と何か言いたげにニヤリと一瞬笑った。…コノヤロウ…絶対楽しんでやる

土御門「ん？あそこにいるのは青髪ピアスじゃないかにゃ〜？」

なにぃ！？

青髪「ん？土御門やないか。そういや今日カミヤン来てへんかったけど土御門はしらん？」

土御門「…いや、俺も知らないにゃ〜」

やばい…見つかる前に逃げなくては…

青髪「おおお！銀髪ロリメイドキター！！」

終わった…

人生の終わりを迎えたと言わんばかりの表情でげんなりしてると舞夏ちゃんが話しに割って入る。

舞夏「彼女は私の通う学校の留学生だ。どうやら言葉は話せないらしいぞ」

青髪「ふうん、そうなんか…まいねーむ、いず、ぴあす、あおがみ！」

いやいや、それあだ名だろ…俺が不審者を見るような眼差しを向ける

青髪「おお、通じたで！俺の英語力も捨てたもんじゃないな」

英国人に失礼だ

「……………#」

なんかムカついたので無言で蹴りをいれた（しかも弁慶の泣き所）

青髪「あばあ！いやいや、今のは名前！自己紹介しただけやって！」

舞夏「あはは、もしかして『蹴ってくれ』と解釈したんじゃないのか？」

2人は変に解釈したのだと感じ青髪は涙目、舞夏ちゃんは可笑しそうに笑った。

ただ土御門だけは事情を知っているので黙ってニヤニヤしていた

青髪「えと、名前！俺は、ピアス、青髪や！」

だからそれあだ名だろうが

再び無言で蹴りを入れてみる。しかも金的に

青髪「うばああ！……け、蹴って……くれ……ちやう……じ……しょうかい……しただけ……や……」

そのままくの字に折れ曲がって前のめりに倒れる青髪。

なんかすつきりしたよ、上条さんは

土御門「（カミヤんカミヤん、小萌せんせの所には行ったのかにやゝ?）」

舞夏ちゃんが尻を突き出して突っ伏す青髪をツンツンしている隙を
ついて小声で話しかけてきた……ってやば！

土御門「（その表情はまだ行っていないってことかになや? 舞夏には誤魔化しとくからカミヤんは行ったほうがいいですたい）」

「（……すまん、あと頼む）」

おどけた口調ながらも気遣ってくる土御門に礼を言って駆け出す…
後ろで「白や!」とか聞こえた気がしたが無視だ

*

*

*

*

それから歩くこと数10分。小萌先生の住むアパートにたどり着く。

今後のこともあるし、相談…

??「あれれ?うちはメイドさんの出張サービスは依頼してないですよ?」

しようと考えていると聞き覚えのあるロリボイス。

振り返るとやはり見覚えのあるロリっ娘…月詠小萌先生がお酒が入ったビール袋を携えて立っていた

続く

第4話：【体験】（後書き）

今回の上条さんの不幸…土御門舞夏にメイド研修を受けさせられる
（夕方まで）、青髪ピアスにメイド服姿を目撃&下着を見られる

第5話：【把握】（前書き）

ようやく書き上がりました

誠に申し訳ありません…

第5話：【把握】

小萌「あのー、メイドちゃん？」

我が担任様が僅かに上目遣いで見上げながら顔を傾ける。

「いえ、お…私はメイドではなくて」

小萌「でもメイド服着てますよ？」

確かに今の俺は銀髪ロリメイドだ。それはまぎれもない事実だ

小萌「ん…：なにか事情があるみたいですし、立ち話もなんだから入るですか？」

小萌先生が古ぼけたアパートの一室（先生の自宅らしい）を指差しながら言う。

「えと…お願いできますか？」

小萌「はいです こう見えてもわたしは先生なんですから、生徒さんの悩みを聴くのも仕事のうちですよ」

相変わらずの人懐っこい笑顔を向けながら自宅の鍵を開けて中へ案内して下さる我が担任さま。

「お、お邪魔します…」

小萌「はい、どうぞです」

先生の部屋の中は…まるで中年教師のような薄汚い佇まいだった。部屋中の至るところに点在する空き缶すべてビール銀色の丸い灰皿に山のように詰まった吸いガラ、酒のつまみにしたのか空き缶と同じように珍珠の空袋も転がっていた。

小萌「あわわ、あんまり部屋を見渡したら恥ずかしいですよ」

確かにこれは恥ずかしいわな…

小萌「オホンっ…それでメイドちゃんは何がお悩みなんですか？」

小萌先生がやや顔を赤面させながら咳払いし、用件を切り出した

「ええと…先生は突発性の性転換ってわかりますか？」

俺は緊張した面もちで尋ねる

小萌「突発性…それは薬の服用や能力で、ですか？」

小萌先生は笑い飛ばすでもなく真面目に問い返してきた。表情も見た目に反した学園都市の教師のそれに変わっている。

「薬はわかりませんが…能力ってことはないと思います」

そう言ってからすっかり華奢になってしまった自らの右手を一瞥する。

俺には特別な力がある。それは異能のものならどんな力でも無力化できる右手が。

幻想殺し（イマジンプレイカー）。それが俺の力だ

この姿になってから試していないが、能力によるものなら一切効かないはずだ

小萌「うーん…能力ならチェンジセクシャル、薬なら第8学区で研究されていた性別を転換させるのがあるですが…でもそれがメイドちゃんの悩みと関係あるですか？」

「…………俺がその突発性の性転換した者だと言ったら、信じてくれますか？」

小萌先生が俺の発言に目を丸くする。まあ、普通は驚くわな

小萌「それじゃあ…あなたは男の生徒さんなんですか？」

小萌先生の神妙な表情を向けてきた。俺も真面目な表情をして頷く。そして――

「俺は上条当麻ですよ、小萌先生」

ハッキリと正体を告げた

小萌「ふえ？上条ちゃん？………… ええええ！？」

俺の発言に小萌先生がきつちり10秒ほど硬直し、その直後に部屋の外まで響きわたるような大きな声で驚愕した

……先生のロリボイスでの絶叫はキツイ……

小萌「なんで?! どうして上条ちゃんが?!」

さつきよりも声が小さくなったが、それでも大きめの声で尋ねながら身を乗り出して聞き返してきた

「ちょ、先生、顔が近いです」

小萌「あわわ、失礼しましたです」

俺の言葉にハッと我に返って先ほどの位置に戻る。それから再び咳払いをして落ち着いてから真剣な目を向ける

小萌「それで……なんで上条ちゃんが女の子になってるんですか? 見た目の面影は全くないですよ?」

「それが俺にもさっぱりなんですよ……朝起きたらこんな姿になってまして」

不幸だ……と呟き、ため息をつく。本当にわけがわからない……

小萌「いきなり上条ちゃんがなんの連絡もなく休むから心配してたのですが、そういう理由だったのですか」

「面目ないです……」

申し訳なく頂垂れる。土御門の奴……適当な理由を作って伝えてくれなかったのか

小萌「それにしてもおかしいですね？チェンジセクシャルは能力者自身限定だから他人を性転換できないですし、それに…」

小萌先生が再び学園都市の教師の表情になって考察する

「じゃあ薬ですか？」

俺の言葉に先生はゆっくり首を左右に振る。

小萌「それはあり得ないです。第8学区の薬はまだ研究段階でラットへの投与までなんですよ。それも成功例はかなり稀でして…大半は遺伝子異常で死に絶えてるです。だから上条ちゃんみたいに人間へ投与して成功する確率はほとんどゼロなんですよ」

小萌先生が悲痛な表情で答える。たとえ実験用のラットでも生き物の生き死には悲しいようだ。心優しい小萌先生に穏やかな気持ちになる。

「ということは…俺は元に戻れないんですか…？」

半ば諦めの入った声色で尋ねると

小萌「今は手段がありませんが、大丈夫！上条ちゃんが元に戻れる方法をきつと見つけだしますよ！」

俺を気遣ってかニツコリと優しい笑顔を向けた。

不覚にも泣きそうになった。…まずい、幼女化してから情緒不安定になっていたようだ

「先生…グス…」

小萌「仕方ありませんよね、こんな事態になつては誰でも不安になるですよ」

遂には堪えきれなくなって泣きじゃくる俺を先生は優しく抱きしめてあやしてくれた

うつ…不幸だ…グス…

続く

第5話：【把握】（後書き）

今回の上条さんの不幸…子供のように泣きじゃくる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7582s/>

とある性転の幻想殺し少女(イマジンプレイカーガール)

2011年7月21日12時36分発行